

<私が出会った名物先生シリーズ③>

流れは絶えずして 昔の学校ではあらず！

私の中学時代の国語教師のC先生。飄々としていてつかみどころがない。訥々としたしゃべりの合間にふと親父ギャグや駄洒落が入る。

「温故知新」を「うんこちしん」と言ったり、「春はあけぼの印のサバ缶」と言ったり、「藤原鎌足」を「ふじわらのかたまり」なんてわざと間違える。特に受けを狙ってやっている素振りもない。そこがまた面白い。授業を進めていくとすぐに話が、いわゆる「脱線」する。自分の家庭のこと、ご近所のこと、同僚の先生の話、今までの教員生活のエピソード、時事問題、等々。くだらないことばかりだが聞いていると妙に味がある。

まじめな生徒はややあきれていたところもあったが、勉強が苦手だったりいたずら好きな生徒は、脱線するのを喜んでいて。自分もその一人で、わざとそっちの方に率先して誘導しようとしたものだ。

そんなもんだから、教科書なんていっこうに進まない。「まあ書いてあることはみんな日本語だから読めばわかるよ。」「勉強なんてのは、人から教わるもんじゃなくて、自分でやるもんだ。」確かに自分もそう思っていた。いい加減と言えいい加減だったが、生徒や保護者からの人気は根強かった

田舎の中学校で悠長な時代だったので、いろんな意味で寛容な雰囲気だったが、今のこの時代、前述のような発言をしたら大問題だろう。だったら、学校はいらない、先生はいらない、もっとしっかり授業をしてくれないと困る、と怒鳴り込んでくる保護者もいるかもしれない。

白状すると、私も、自分の教員人生で、これと似たようなスタイルで授業を進めていたこともあると認めざるを得ず、大いに反省するばかりだ。

まず、授業の冒頭で、昨夜のテレビ番組ネタや巷の噂話をする。子どもから笑いをとってリラックスさせて、ハイつかみはOK。それから本番。50分授業が45分授業になったことも度々あった。すみません。

※ ※

さて、<私が出会った名物先生シリーズ>を計3回にわたって書いてきました。皆さんも、学校に通った経験が皆無ということないでしょうから、中学校時代にいろんな先生に出会ってきたことなのでしょう。それこそ、先生の人物評でもだれもが作文がかけるくらいなはずです。

どこの学校にも、名物、豪快、型破り、天衣無縫、ハチャメチャな先生がそれなりにいたような気がします。それだけ実際個性豊かな先生が昔は多かったのではないのでしょうか。自分も含めて、今の先生は小粒と言われても認めざるを得ません。

別な見方をすれば、授業であれ部活動であれ、自身の個性や指導スタイルを全面に出して、教師主導で思い切って勝負できた時代でもありました。ある意味教師には幸せな時代だったのかもしれませんが。

現在でも、もちろん、教師が与える子どもへの影響力は少なくないはずですし、教師側からすれば先生という職業は大いなるやりがいがあることは変わっていないはずです。

だからこそ、先生方には、授業力・人間力を磨くためのたゆまぬ自己研鑽に努めてほしいものです。また、常に周囲から最も批判や非難の対象にもなり得る宿命を負っていると、覚悟の上で教師を続けるべきだと思います。

さて、令和3年6月3日に、国の教育再生実行会議から今後の国の教育施策の指針となる第十二次提言がなされました。ここではニューノーマルにおける教育の姿として、「一人一人の多様な幸せと社会全体の幸せ（ウェルビーイング）の実現を目指し、学習者主体の教育に転換」「デジタル化を進め、データ駆動型の教育に転換と学びのデータの活用」が示されています。

「ニューノーマル」は、直訳すれば「新しき標準の」ですが、この言葉には、「変化の前には逆戻りしない」というニュアンスが含まれていると言われていています。また、最近の使われ方としては、「変化に対応できない人間は時代に取り残されてしまう」という警告の意を含んでいるとも言われています。

これまで積み上げてきたこと、自分が長年培ってきたスタイルを大事にする姿勢もちろん大いに重要で、自身のキャラクターや人間的魅力は教師としての最大の武器です。しかし、時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく生徒を育てるということを中心課題としている私たちには、単に、変化したことの対応に追われるのではなく、なぜこの変化が必要なのか、その本質を見極め、明確なビジョンのもと、具体的な方策をもって積極的な授業づくりや学校運営を行うことが求められています。そのための歩を止めることなく前進し続ける、保護者や地域を含めた山潟中学校でありたいものです。

中学時代、私の出会ったすべての先生方、もう皆さん鬼籍に入られてますが、その節はたいへんお世話になりました。おかげで私はこんなに大きくなりました。漢字の書き順がデタラメな先生もいました。自分の好きな古代史ばかりに時間を費やして教科書が終わらない社会の先生もいました。日本語にしか聞こえない英語の発音の先生もいました。悪いことをして往復ビンタをお見舞いしてくれた先生もおりました。だからと言って、あの当時、あなた方を、これっぽっちも見下したことも恨んでもおりませんでした。個性的で「人間くさい」先生方に出会えたことをとてもありがたく思っています。

ただ一つ言えるのは、もちろんそれは今の時代にあっては、全く通用しない、教師の姿としてはどうかなあと首を傾げる、あるいは体罰や不適切な言動等はどんな理由にせよ決して許せることではないということです。

C先生、天国はどうですか？先生の数あるギャグやおもしろい話も私の辞書に加えて、授業で何度も使用させていただきました。今は全く受けません。当たり前のことながら、笑いのツボも時代と共に変化してしまっただけです。